

文芸読本

夏目漱石Ⅱ



西 間 期

文芸読本 夏目漱石Ⅱ ©1977

初版発行 昭和五十二年一月三十一日

定価 六八〇円

0091-037701-0961

落し本乱し本はお取りかえいたします

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社 河出書房新社

〒162 東京都新宿区住吉町九五

電話 東京(三五五)五三一

振替 東京〇一〇八〇二

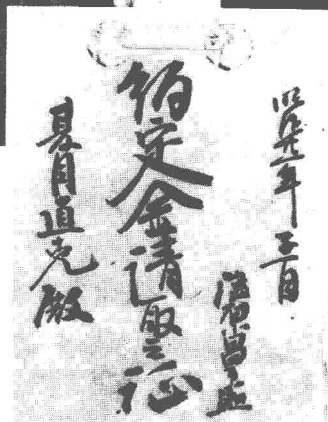
印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社



12歳(明治12年頃。東京府立第一中学校正則科入学の頃

5歳(明治5年)頃の漱石と養父塩原昌之助。この関係は作品『道草』に詳しい。この頃、溺愛されたという



21歳(明治21年)、上記塩原家より夏目家に復籍。その際養育料として金貳百四拾円を実父より払った時の塩原家よりの「約定金請取証」



19歳(明治19年)、第一高等学校予科時代。前列左より二人目漱石。後列右より三人目中村是公

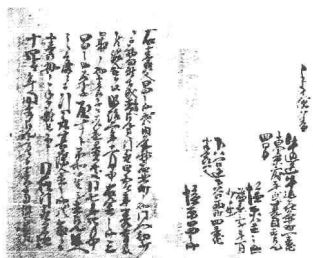
24歳(明治24年)富士山登山記念。中央漱石



26歳。帝国大学文科大学卒業。就職浪人期。右より佐藤友熊、漱石、中川小十郎、太田達人



夏目漱石アルバムⅡ



父直克の手になる手続書



養家から復籍した折の戸籍正誤願

生誕地跡の碑



28歳、松山中学に赴任。当時の同校



29歳、熊本第5高等学校講師に就任。結婚して鏡子を迎えた新居



38歳「吾輩は猫である」を発表。漱石の猫のスケッチ



39歳、文科大学卒業生記念写真。
前列左二人目漱石、右端上田敏



27歳、肺病初期の徴候が見え厭世的になる。
この年、鎌倉円覚寺の塔頭帰源院に参禅する



31歳、熊本時代



松山にある坊っちゃん電車



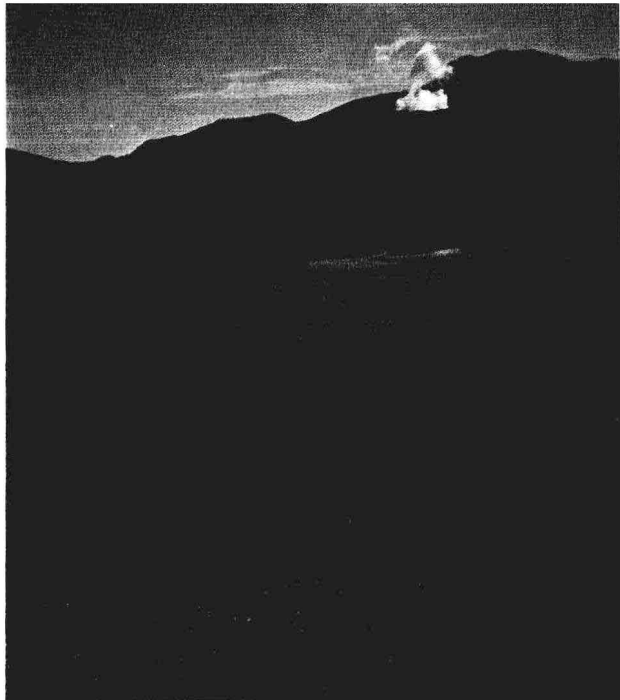
東大赤門(『三四郎』)



京都知恩院(『虞美人草』)



比叡山延暦寺(『虞美人草』)



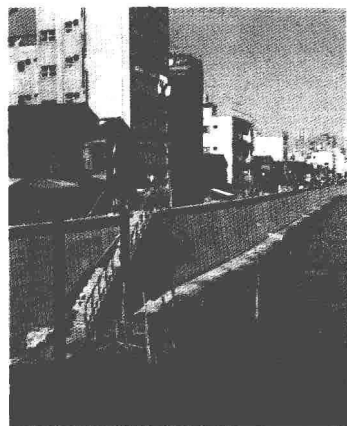
阿蘇(『二百十日』)

東京・濠端の土手道(『吾輩は猫である』)

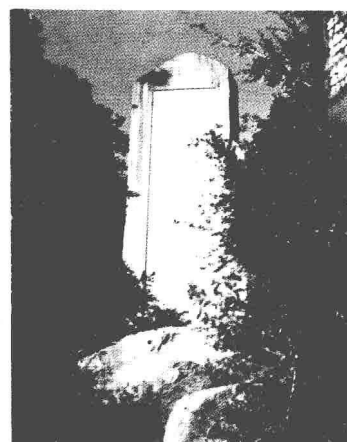




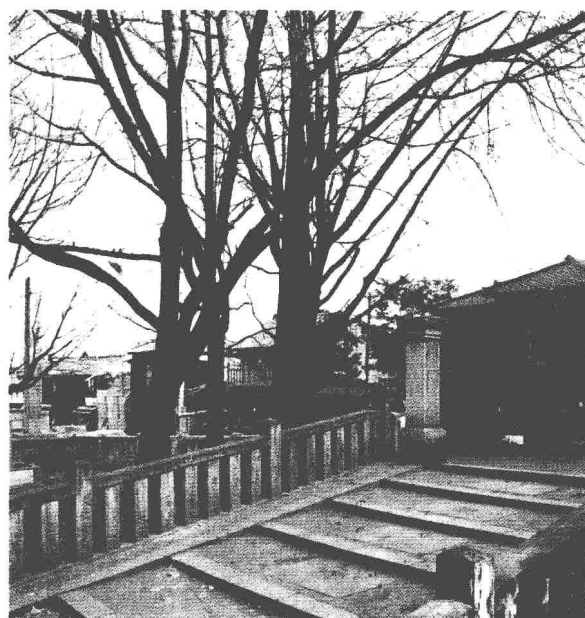
東京・団子坂(『三四郎』『道草』)



既橋より蘆家のあった浅草三間町を望む



伊豆修善寺にある滞在記念碑



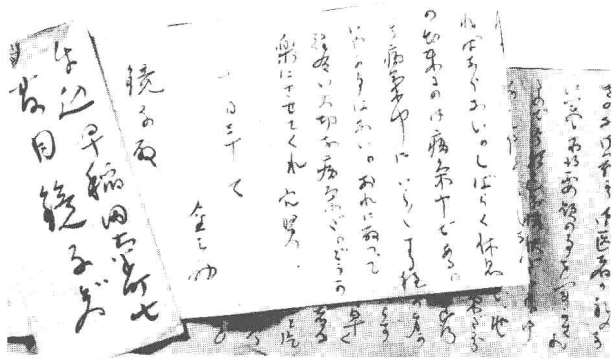
東京・根津権現界限(『道草』)



東京・穴八幡神社(『彼岸過迄』)



43歳、『門』執筆の頃



左上、明治43年、胃潰瘍の転地療養に行った修善寺温泉菊屋で数度の吐血、危篤となった。菊屋旅館の漱石大患の間

左下、同年10月舟形寝台で帰京。長与病院入院。その病床より妻鏡子宛への手紙。「病氣中にいらいらする程いやな事はない。…どうか楽にさせてくれ」とある

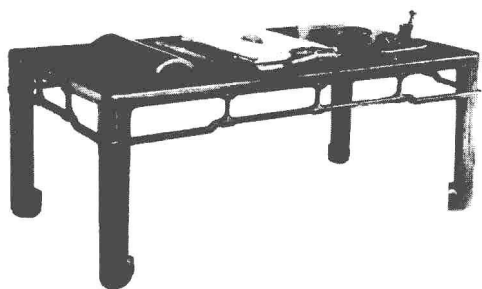
44歳、修善寺大患時の医師森成麟造の帰郷の折りの記念撮影。後列左より、松根東洋城、森成医師、東新、漱石、野上豊一郎、安倍能成。前列左より、次女恒子、鏡子と長男純一、四女愛子、長女筆子、三女栄子、小宮豊隆、坂元雪鳥、野村伝四。円内左より鈴木三重吉、森田卓平





新思潮のあなたのもとと久米君のもとと成瀬君のものを
 読んで見ました。あなたのものは大変面白いです。落着が
 あって巫山戯ていなくて自然其儘の可笑味がおっとり出
 ている所に上品な趣があります。夫から材料が新しいのが
 眼につきます……云々

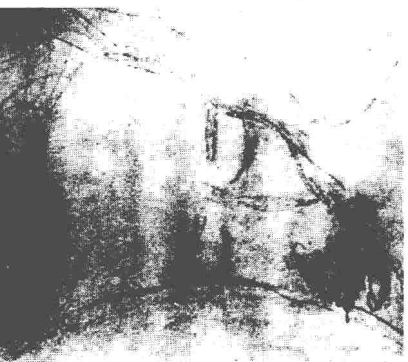
芥川の『鼻』を激賞した漱石の手紙。「拝啓 新思潮のあなたのもとと久米君のもとと成瀬君のものを読んで見ました。あなたのものは大変面白いです。落着があって巫山戯ていなくて自然其儘の可笑味がおっとり出ている所に上品な趣があります。夫から材料が新しいのが眼につきます……」云々



『坑夫』より『明暗』を執筆した愛用の紫檀の机

左、47歳(大正3年)義妹豊子の結婚式で。左端漱石夫妻

死顔のスケッチ(津田青楓画)



49歳(大正5年12月9日)、永眠。臨終直前の漱石





東京・伝通院(『こゝろ』)



鎌倉由比ヶ浜(『こゝろ』)



漱石山房跡にある猫塚

東京・雑司ヶ谷墓地(『こゝろ』)



『明暗』を起稿した湯河原天野屋



文芸読本

夏目漱石Ⅱ



河出書房新社

狂氣と羞恥



小島 信夫

夏目漱石という人は、文学者というにふさわしい人である。小説の達人でもあったのだが、普通の小説家と違って、その生涯を見通してみても、妻以外の女とのことで華々しい事件があったわけでもなく、いつて見れば貧弱な内容しかない。白鳥も、大分あとになって『道草』を読んだとき（『道草』を読んで）、この小説にほとんど漱石の小説の材料がこめられているのを発見して、この小説は漱石理解の上で非常に大切な小説だといっているが、また、漱石という人は、あんな僅かな材料からよくも小説を書きつづけたものだ、と驚いている。このことは、文学者漱石のことを何かにつけて文学史的に勉強している人には珍しいことではないが、本当はやはり驚くべきことなのである。

鷗外はドイツで異国女性とのあついロマンスがあるし、その結婚は二度にわたり若い女性と再婚し、甘い『妻への手紙』一巻がある。自然主義作家はもちろんのこと志賀直哉にしても、青春時代と、中年とに二度の危機をもっている。谷崎は勿論のこと、芥川に

も晩年に何かある。女性とのことが、あるかないか、ということが材料として豊かか貧弱かということと直接関係があるか無いかは簡単にいえないとしても、何しろ漱石は、恋愛小説を書きつづけた人であるのに、彼は終始家庭の人であった。こういう人は、ほかに思い当らない。

漱石は私が生れた頃に亡くなったし、だいたい私の父親の年齢の人である。自分の年齢が漱石没後の年数である。私はもともとこの偉大な作家のものは少年の頃『門』を読んだぎりであったが、東京の高等学校へ出てきて、漱石とつながりのある三人の教授の存在を知った。

『三四郎』の広田先生のモデルといわれたドイツ語の岩元先生は、私は直接教わることもなかったが、昭和十年になっても、昔同様に、先生の訳のいいわしと少しでも違っている答案には零点がつくので、落第者が多いといわれた。私は菅虎雄にはドイツ語を習ったが、漱石が松山行きのときに世話になり、熊本の五高へ行ったと

きも、先ず菅さんのいた家に寄宿したり、鏡子夫人がツワリがもとで強いヒステリイになって井川淵にとびこんだのを新聞沙汰にしないように止めてくれたのは、菅さんの知人の浅井榮照という人であった、というようなことを何にも知らなかった。況んや明治四十二年、菅さんが夫人をなくされて、漱石夫妻が葬式に出かけて行かれるのが日記に出ていたりすることも知らなかった。

小柄で温厚な瘦身の菅先生は、黄色の表紙の青木留吉のドイツ語教本をもって、ブラリブラリと着物に袴をはいた姿で教壇に登り、ハリのある愛情のこもった声で話しかけられた。その黒板にかかれたドイツ文字は美しかったが、果せるかな、先生は書家であった。一年の終り頃から先生は休まれるようになり、それから何年後には亡くなられたけれども、家に残っているテン書で書かれた卒業アルバムアルバムの題字は先生の筆になるものである。アグ、アグという綽名あななの西洋史の先生は、戦闘の話に及ぶと微に入り細に入り、先生の話がつまらないというわけではないが、当時そういうことに興味のなかったのか、怠け者だったせいなのか、やがてノートをとることを止めてしまい、そのまま代返で通してしまった。この先生が、漱石の友人であり、漱石が斎藤阿具先生のとを譲りうけてたしか千駄木町ちだぎの家にいられたことなど、一向に知らなかった。

校長のモリケンと綽名された骨っぽいセイカンな感じの森巻吉氏には、入学式のときに、お前たち秀才と思ったら大間違いだぞ、という話を中心にした長い演説をきいたが、これまた漱石の親しい友人である。私の在学中に亡くなられ、渋谷の宮益坂を少しのぼって左に折れたあたりの大きい邸へ葬式に参列した。

私の卒業した岐阜中学の運動場の垣根の向うに見えた「訓盲院」

の創立者、初代院長が、ほかならぬモリケンの尊父、森巻耳であることを知った。もともと森巻耳氏は岐阜中に英語教師として赴任されたが、眼病になりその任に堪えなくなった。やがて氏は伝道師 A・F・チャペル氏によってクリスチャンとなり、両氏力を合わせて聖公会訓盲院を創められ、のちこれは県立となった。大正三年、巻耳氏が亡くなられ、夫人しげ女史は舎監として学校に残っていたが、大正十四年退職して、東京の巻吉氏のところに移った。明治二十四年、濃尾大震災が起り罹災盲人の生活安定のため両氏が鍼灸伝習所を設けたのが、「訓盲院」創立のそもそのきっかけであったが、この年は漱石にとってもなかなか意味深い年であることは、あとで述べなければならぬ。

私が当時既にかなりイメージが色あせていた第一高等学校にいたときに、漱石とつながりのある人を見聞した次第は右の如くであるが、第一高等学校にある教養的フンイキというものの何分の一かは、漱石によって代表されるものであったといってもよかった。そうしたことにうとかったのは、私ぐらいだったかもしれない。

私は今、その昔漱石がしばらく講師として出ていた明治大学に勤めをもっているが、ここの工学部に同郷の人、堀口捨巳氏（建築学がおられるが、氏の語るところによると、漱石が亡くなったという悲報が伝わると、当時大学生で本郷通りを歩いていた氏は、眼の前が真っ暗になってしまったということである。私はどういふものか、この話を思いうかべる度に胸がつかまってくる。

堀口氏は濃尾震災の震源地の根尾谷に近いところの出身であるが、もう少し岐阜よりの鷺山さぎやまという長良川べりの部落が森田草平の出身地である。草平は漱石の弟子の中でも変り種だが、いかにもこ

の土地出身の人らしく漱石の前で小さくなっていたくせに、いったん口をひらくとズケズケしたことをいい、漱石門下生となるきっかけになった『草枕』のあと、先生に思いきった作品評をし、先生にドストエフスキイをすすめ、あとで漱石が修善寺で胃から血を出して死にかかったあと、漱石が自分とドストエフスキイとは、不思議なほどよく似ているといったら、草平は笑った。そのくせ、平塚雷鳥と心中未遂事件をおこして、新聞沙汰になり、身柄を漱石にひきとられ、夜いっしょに二人は風呂に入った。「先生はもう一度この世に生きることにになったら、生きたいと思いませんか」というような妙に子供じみた、思いつめた、宗教的なニオイのする質問をしたところ、草平の前に裸でいた漱石は胃のあたりを叩いて「胃病さえなけりゃねえ」とフィジカルなことをいった。草平は、これは自分への思いやりかもしれぬ、と述べている（『漱石先生と私』下巻）。

朝日新聞に漱石の世話で、心中に至るいきさつを書いた『煤煙』が評判になり、当時は、漱石以上だといわれた。そんなことでのぼせあがったはずはないと思うが、と草平はいっているが、先生は自分には何かしらつらく当られるような気がした。最も可愛がられた小宮豊隆も、漱石の作品のモデルとなったりしていることは勿論で、うるさい男の草平もまた漱石に大いに影響をあたえているが、少なくとも表面上は作品理解のうえで漱石と草平はどうしても折り合いがつかぬところがあった。

この草平のことを「あれが一番いい人だった」と私によく語られるのが、俳人であり元明大教授の英文学者、林原耕三氏である。氏はもともと岡田と名のり、芥川や久米正雄を大正四年に漱石山房に連れて行った。私は結果的には林原先生のひきで明大へ勤めたこと

になるが、そのときも先生と漱石との関係はよくは知らなかった。八十をこえられた先生は漱石の思い出を時々書かれるが、先ず第一に河出から出たグリーン版の漱石集の中の『作家の横顔』に「世にも優しい人」（林原耕三「漱石山房の人々」講談社に収録）というのがあ

る。漱石は大ざっぱにいった三度「神経衰弱」に見まわれている。その第三のときであろうと思うが、林原先生が鈴木三重吉からきいた話である。神経衰弱が昂じると、漱石夫婦の仲は険悪になり、漱石は書斎へ籠ってしまっただけだが、ある日、漱石は三重吉と次男の伸六といっしょに散歩に出かけた。玄關のあたりで伸六が石か何かに頭（ぶ）いた。すると漱石は、

「伸六、気をつけるよ、女にはかなわぬからな」と

といったのである。林原先生はこう書いたあと、三重吉はフィクションの天才だから、これも作り話だったかも知れないが、そうとしたら、三重吉一代の傑作だ、という。林原先生もいわれるように、漱石はこの病気になるまで長女の筆子や次女の恒子も夫人と同じく女の仲間に入れて、剣呑な者たちのシンボルとして頭の中で取り扱った。その模様が手にとるように分るのである。

上の二人のお姉さんと二人の坊っちゃん先生の印象は、こわいの一語に尽きるが、中の二人のお嬢さんの場合は違っていた。

林原さんは、このあとで、愛子の父の思い出の言葉を引きながら、次のようなエピソードをあげている。三女の栄子さんが人形をほしがっていた。それを買いに、四女の愛子さんと遊びにきていたイトコの少女と三人をつれて、寺町へ出かけた帰り道のこと、漱石は疲れた愛子を背負い江戸川堤を歩いてくるうち、だんだんに羽織

の手が抜け、紐が胸へあがってきた。漱石は何度も愛子をずりあげる。胃弱の父はさだめし大変だったのだらうと悲しくなる、というのである。林原先生は、恐ろしいばかりの父であつたという漱石の優しい面をあげ、恐ろしいという印象をあたとすれば、気の毒な病気のせいだ、という。

林原先生は、筑摩書房の『現代日本文学全集』の漱石集の月報に「あの眼、あの言葉」という暗示的な文章を寄せている。それに移る前に林原先生について少し紹介しよう。

先生は漱石の書簡に度々あらわれるが、漱石の日記及断片集の中にも登場する。

明治四十二年四月三日の日記に「岡田耕三小田原の塩辛を送る。明日東京へ帰る由。『煤煙』に厭きたとある。」と見える。同年八月七日には、「昨日岡田耕三が来て第一高の仏文学志望の試験を学科の方で及第したが、体格がややしいと言って落胆していたが、新聞を見ると首席で及第していた。定めし嬉しかろう。」と見える。小説『それから』が漸く終末に近づきつつあった頃のことだ。ついでだが、それからしばらくして「菅虎雄の細君死す。産後経過不良」とある。

林原先生の文章によると、耕三が一高三年のとき（明治四十四年頃か）、退学しようかと思ひ、漱石に相談した。しばらく前に北海道で父が事業に失敗したので急に学費が途絶えてしまったからである。育英会から借金をした（漱石も学生時代借金をし、結婚後も月給から返していた）あと、漱石の著書の校正をして若干援助をして貰ったが、のこりは下宿の借金になっていた。右手の書^{しづめ}庫に悩み、学校もサボっていた。山房の客間に漱石夫妻と三人でいたとき、鏡

子夫人はこうきり出した。

「あんた、からだも丈夫でないのに、そんな無理をして、学校へも出ないでいるなんてつまらないでしょう、うちの子に貰ってあげるわよ」

漱石の意向をさぐるふうでもなく、ごく自然ないい方であつた。すると漱石は、

「突然こんな大きな息子が出来たら、うす気味がわるからうな」と穏やかな口調でいった。

耕三はそのとき、長女筆子のフィアンセになることだと思ひ到らなかつた。このあと、鏡子一流のやり方（さしあたり『明暗』の吉川夫人が思ひ浮ぶが）で、漱石の承諾を得たものとしてどんどん進められた。

「実は筆子を小宮さんに貰ってもらうのが一番いいと前から思っていたのに、あの去年の夏帰省した時、出し抜けに田舎からお嫁さんを貰って来てしまったじゃありませんか」といったりした。

このあと、耕三は漱石の家で、筆子が妹にいじめられたといつて耕三の胸に顔を埋めて泣き出しそうになり、そこへ夫人が通りかかつてチラと眺めたので、あわてて身を離そうとして羽織の紐の環に筆子の髪の毛がひっかかつてとれなくなり狼狽し、この一件が漱石の耳に入りはしないか、と恐れた。

このことはそのままにすんだが、あるイキサツから養子の件も取り消しになった。「夫人の」不興の理由は、悲しいかな、先生に聞かされていた。それは漱石の神経衰弱が昂じて夫人との間が険悪となつたとき、耕三が先生をかばつて夫人の意に逆らつた結果になつたからであつた。

それが如何なることであつたのか、書かれていないし、私も直接うかがっていないけれども、いずれ後で述べるこの夫婦の生活について唯一の自叙伝小説『道草』だとか、鏡子の談話をもとにした『漱石の思い出』の中の実例によつて、ほぼ想像がつこう（最近出た『漱石山房の人々』の「鏡子夫人」の節に、くわしく記されている）。

それはそれとして、私は少年時代、久米正雄の『破船』を読み、はじめて小説の真似事をしたことがあるが、漱石の死から始まるこの小説をこんど読み直してみると、林原先生は原田として登場する。小説では、久米に当る小野が次第に夫人や筆子の信用を得るが、松岡譲に当る杉浦が小野を出しぬぎ結婚する失恋物語である。

先輩格の森田や小宮も登場して苦々しげに様子を見守っているが、芥川に当る柳井が冷静な批判者で、菊池寛に当る人物が実際の意見を述べる。『破船』の作品としての価値は別として、筆子を含めるこれらのイキサツには、何か暗澹たるものがあるが、私はこの小説を読みながら、弟子たちは、師匠の書いた『門』『それから』『心』の三角関係を地で行かうとしていたのではないかとさえ疑うられてきたのである。筆子は久米にも松岡にも、ちょうど耕三に對したと同じような、自然的なコケトリイを示しているし、夫人の態度にも、女親分ふうの態度が見られる。漱石が腹を立てそうな慎しみのなさがそこにある。林原氏は『漱石山房の人々』の中で、漱石の家の女性たちはコケトリイから最も縁のない人たちばかりだったと書いている。

林原先生が「どうしても誤解をとおきたいから」というつもりで書かれたというこの一文の最後に（どうして養子の件が取消しになったか、という理由についてだと思ふ）、その一文を書いた真

の目的は次のことだ、といわれているのである。

《先生（漱石）のあの「突然こんな大きな息子が出来たら、薄気味わるからうな」といふ表現に就いてである。あの時の先生の眼つきと言葉のニュアンスとが深く私の心に刻みつけられて、いつまでも忘れられない。これはウィットでも、ジョークでもない、先生独特のヒューマーである。そしてそれは先生のシャイネスから浮かび出るものである。このシャイネスを見逃しては所詮、漱石文学は語れない。あの暖いヒューマーの裏に潜む愛情と羞恥、これが先生の「人」と文学とのたぐひないチャームの源泉である。》（『漱石山房の人々』）

漱石のシャイネスの理解者である林原先生は、実はこのシャイネスの持主である。弟子の中でも、林原や芥川などの後期の弟子にのみ受けつがれたものなのだろうか。漱石の眼つき、言葉というものは、私には正確につかめるといふわけではないが、チャームの源泉であることはいふまでもなく、漱石の狂気というものとも、どこかつながりがあるような気がする。私はこれから、限られた短い枚数で、漱石の生涯を辿ってみるわけで、いかなることになるか分らぬが、おそらくこの問題が中心となるのだらう、と思う。

漱石は慶応三年、江戸牛込に生れているが、秋声や、犀星がそうであつたように里子に出され、里親といふしよに一時はピクのようなものの中に入れられて、夜店に出ていたが、その後、問題の人となつた塩原家に養子にやられた。夏目家はもとと勢力のあつた名主だったが、家運は傾きかかっていた。五男末子で父の五十三、四

の年寄りっ子であり、一方もと御殿女中であつたという母親が四十になつて出来た子供なので育てるのが恥かしいというわけでもあつたらしい。塩原家にゴタゴタがあつて、九歳のとき夏目家にもどつてくるが、実母は十四歳のときに死んでゐる。

十分に母親の愛を得られなかつたということは、この少年に影を投げかけたにちがひないし、家庭というものが、一つのきまつたコースを辿るものではない。この少年をしてやがて人間というもののアテになるものではない、というふうに感じさせたのは当然のことである。また田舎育ちのものは、成人しかかると直ぐ東京へとび出して行つてしまふが、東京生れの者は、親類縁者の家庭というものと、鼻をつきあわして暮さなければならぬ。漱石がそうであつた。この二つのことは重要である。

一高のとき子規を知つた。その後二人の友情の深さは尋常でない。鼻っばしの強いこの田舎者に圧倒された模様であるが、明治二十四年の四月に子規に書いた手紙には「我狂に組せん」というようなことをいつてやっているのである。

かねて英語で外人にも負けぬ文学を作ろうと思つていたのがムリであり、間違ひであるらしい、というふうに考え始めた（子規は国文にいたが、翌年、落第退学した）。

ところで、この頃、漱石にとつて二つの大きな事件あるいは、事件のキッカケが起つたことになつてゐる。一つは何年越しのトラホームをなおしに駿河台の井上眼科へ通ううち、物腰のやさしい若い女を見かけ初恋をおぼえたというのである（夏目鏡子『漱石の思い出』）。

この女のこと、漱石はある日実家へもどつてくると（それから三年後のことらしい）兄に向つて、とつぜん、

「私のところへ縁談の申込みがあつたでしよう」と、険しい眼つきをしてたずねた。自分に話もしないで断つてしまつたと怒り出したというようなことがあつた。これが、漱石がおかしくなる最初のことである。

この女については、漱石は晩年になつて、虚子と九条へ能を見に行つた折めぐり會つて、すぐそれと気がついた。してみると、漱石の頭の中に相当の印象をとどめていたことはまちがひない。だが教師として松山に行つてからも、芸妓あがり、漱石の嫌いなタイプらしい、この女性の母親が、彼を追いかけてきて何ごとか探索してゐると妄想をいだいたことがあつた、ということ併せて考えると、気味の悪いものが、漱石の中にあつたことになる。そして何ものが漱石の求めるものを逸速く妨害しようとしてゐるらしい、という考へでゐることは察しがつくのである。この女性が漱石の理想の女の一つのタイプであつたようであるが、その理想そのものが幻滅に終つたという消息はない。しかし、この女性が、けしからぬ女の娘であるということも、漱石にとつて腹の立つことでないとはいえない。つきつめて見れば彼を妨害するもとはその女性自身の中に潜んでゐたことになりかねない。そうなるとハムレットとオフェリアとの關係みたいなことになる。

もう一つは、三男和三郎の妻の死である。漱石は数年前に、ほとんど時を同じうして二人の兄を肺結核で失つてゐる。和三郎もまた身体が弱く大事にされてゐたせいもあつてか遊人ふうの男であつた。嫂は漱石と同じ年であつたし、夫の愛を受けてゐないことを彼は知つてゐたのだから、話相手になつてゐたに違ひない。美しく敬愛に足る女であつたと、子規に手紙で伝えたあと俳句をいくつも